留学結果報告書

山梨県立大学国際政策学部国際コミュニケーション学科　井出麻乃

はじめに

本稿は、令和元年 8 月 12 日から令和 2 年 3 月 31 日までの約 8 か月間にわたるインドネシアにあるインドネシア大学での交換留学に関する報告書であり、インドネシアでの日常生活や大学生活、大学以外での活動について述べる。

日常生活について

私が留学していたインドネシア大学は、インドネシアの首都であるジャカルタの南に隣接しているデポックという都市にあり、私は大学近くのアパートを借りて一人暮らしをした。部屋はワンルームタイプで、ベッドや勉強机、エアコンや冷蔵庫、調理器具などの家具家電は備え付けで、シャワーもお湯が出たので、快適に過ごすことができた。しかし、インドネシアは南国であり、ヤモリが大量に出るので、爬虫類が大の苦手な私は大いに悩まされた。

食生活については、大学がある日は大学の学食を利用し、それ以外の日や夕食は自炊をしたり、「ワルン（Warung)」という地元の人たちが頻繁に利用する食堂や食事席付き屋台のようなところに食べに行ったりした。ワルンは、ローカルな雰囲気を味わうことが出来、また価格も 1 食 100～300 円ほどでお腹いっぱい食べることが出来るので、貴重な経験が出来た上に、節約することが出来た。

休日は、大学の図書館に行って勉強したり、友達とジャカルタに遊びに行ったり、モールでウインドウショッピングをしたり、ホームパーティーをしたり、バリやメダンなどの国内旅行や、国外旅行をしたりして過ごした。特に思い出に残っていることとして、留学生約 40 人で、ジャワ島の西端にあるウジュン・クロン国立公園に 1 泊 2 日で遊びに行ったことが挙げられる。デポックからウジュン・クロン国立公園までは電車で 1 時間、バスに乗り継いで 7 時間 30 分、船（ボート）に乗り継いで 3 時間 30 分の約 12 時間かかった。移動時間はとても長く、乗り物酔いが激しい私にとって、とても辛いものだったが、その間隣の席になった多国籍な留学生とたくさん話をして、色々な人と仲良くなれたので、とても楽しく、辛い移動時間さえも素敵な思い出になった。ウジュン・クロンではボートから海にダイブしたり、シュノーケリングをしたりして楽しんだ。私は泳ぎが苦手なのだが、友達やガイドの方など色々な人たちに泳ぎを教えてもらったり、時には引っ張って助けてもらったりして、溺れずに楽しむことができた。ウジュン・クロンで過ごした 2 日間は、インドネシアの美しい自然を堪能でき、友達も増えた素晴らしい時間だった。

インドネシアは人口の 90%がイスラム教徒であり、日本と全く違う文化や習慣から、悩んだり孤独を感じたりすることも頻繁にあったが、現地の学生や他国からの留学生、日本人留学生に支えられて、日々楽しく生活することができた。

（アパートの部屋からの風景）

（ワルンの様子）

（ウジュン・クロン国立公園で撮影。海や植物など自然がとても美しかった。）

大学生活について

私は、インドネシア大学の経営経済学部（Faculty of Economics and Business）に留学し、インターナショナルコースの学生や他の交換留学生と共に英語で経済学や経営学を学んだ。具体的に私が履修した授業をいくつか紹介していきたいと思う。

① 開発経済学（Development Economics）

この授業では、実際にインドネシアでの事例を挙げたり、ゲスト講師を招いたりしながら、発展途上国における貧困や飢餓、格差などの様々な課題について学び、更にそれらの途上国が経済的に発展するプロセスを分析することで、どのように経済発展を進めていけば良いか、またそれに伴う諸問題について議論や講義を通して学んだ。ま

た、期末レポートではインドネシアにおける SDG s について約 2000 字のレポートを執筆した。

② 人材管理学（Human Resource Management）

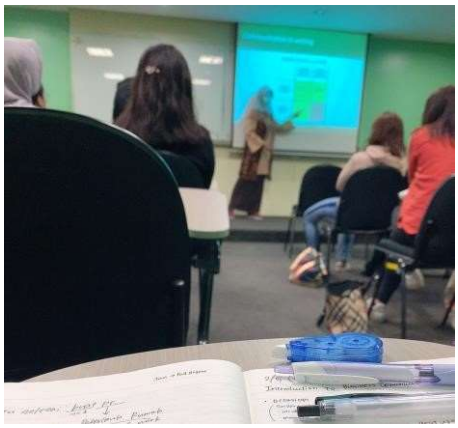
この授業では、実際に「Gojek」や「プルタミナ」などインドネシアの企業の人材管理についてのケーススタディを通して、人材管理とは何かについてや多国籍企業におけるグローバルなマネジメント、モチベーションと仕事についての関係性などを学んだ。この授業はほぼ毎週プレゼンテーションやプチプレゼンテーションがあった。

③ 組織行動論（Organizational Behavior）

この授業では、企業に属する個人や組織の行動原理を理解し、企業という 1 つの大きな組織をより良い方向に持っていくためにはどうすればいいのかをプレゼンテーションや議論を通して学んだ。この授業は学部長が教鞭を取っており、実際にチーム（組織）を作ってコンセンサスゲームやチラシパズルゲームなどのミニゲームを行うことで、楽しく「組織行動」について学ぶことができた。

④ アントレプレナーシップ（Entrepreneurship）

アントレプレナーシップとは、「企業家精神」と訳される場合も多く、この授業では、実際にチームを作ってビジネス（事業）を創りながら、どのようにすれば革新的・独創的なモノやサービス、イノベーションを生み出すことができるのかについて、またリスクに挑戦する姿勢や精神論について学んだ。私は現地の学生と共に、古くて着なくなった服や使わなくなったトートバックやポーチなどの小物を集め、それらをタイダイ染めで染め、販売するというビジネスを創った。



（教室での授業風景）

（講堂での授業風景）ここで挙げた 4 つ以外にも、国際金融経済学やインドネシアの経済・ビジネス、ビジネスコミュニケーション、アイデンティティと

ポピュラーカルチャーなど、経営経済学部だけでなく、人文学部の授業も履修した。これらすべての授業に共通して、プレゼンテーションやディスカッションが毎授業行われ、教授の一方向の講義というものは少なかった。現地のインターナショナルコースの学生の英語レベルはとても高く、また他国からの留学生は英語圏から来た人たちも多かったので、彼らは積極的に議論や授業に参加していたが、私は授業についていくのに必死で全く発言することができず、悔しくて情けなくて落ち込む日々が多かったが、周りの学生や留学生に支えられて、なんとか最後までやりきることができ、それは確実に自信の成長に繋がった。

大学以外の活動について

私は、どちらかと言えば大学の授業よりも大学外の活動に力を入れていて、興味のある活動をしている団体を自分で見つけて担当者に連絡をしたり、周りの人から団体や個人の活動の誘いを受けて参加したり、積極的に様々な活動に参加した。その中でも本稿では、３つの活動について述べていく。

1. 教育に関する活動

はじめに、現地の「Dreamdelion Community Empowerment (Yayasan Dreamdelion Indonesia)」という団体が主催するボランティア活動について述べる。Dreamdelion は、教育、健康、環境に関する問題に焦点を当てたコミュニティ開発のための団体であり、地域の経済的エンパワーメントへの支援を行っている。この団体は、地域社会との協力を得て、ターゲットコミュニティが直面する社会的課題にプラスの社会的影響を与えることを目指している。Dreamdelion という名前は、「Dream（夢)」と「風に吹かれた Dandelion （タンポポの花)」という２つの単語が由来となっていて、「夢を広める」という意味を持っている。先述の通り、この団体は主に教育、健康、環境の３つの問題に関するプロジェクトを展開していて、私は、その中で教育に関するプロジェクトに参加した。

この団体の教育に関するプロジェクトでは、主に貧困を理由に十分な教育を受けることが出来なかった親の元で暮らす子供たちに親が教えることが出来ない勉強や規範、道徳、国際理解や自己実現、自信に繋がる様々なことを教えたり、また親に対しては、手に職をつけて貧困から脱却できるように専門技術や知識を教えたりするという活動をしていて、私は国際理解という面で子供たちに英語を教える活動に参加した。

子供たちは、決して環境がいいとは言えない団地に住んでいて、中には貧困により学校に通えていない子供も数名いたのだが、みんな笑顔で元気でとてもパワフルで、楽しく英語を学んでいて、逆に私がたくさんの元気をもらった。活動の中で、将来の話になった時に、「I want to be a doctor!」「I want to be a soccer player!「Nurse! Police officer!」と、みんな口々

に将来の夢を笑顔で叫んでいて、勇気を貰ったと同時に、どんな境遇にある子でも、自分の夢や目標を追いかけ、自分の手で叶えることができる社会が実現して欲しい、そのために微力ながら自分が出来ることについて考えていこうと思った。

（活動の様子。みんなとても可愛く、とてもパワフルだった。）

2. 環境問題に関する活動

次に、環境問題に関しての活動について述べる。私は、インドネシア大学戦略・グローバル研究科日本地域研究プログラムのコミュニティサービスチーム（The Community Service Team of the Japanese Regional Studies Study Program , the School of Strategic and Global Studies, University of Indonesia）が主体となって行っている、現地の小学生に対して「廃棄物の分別」と「削減、再利用、リサイクル」をテーマにした講演やアクティビティを行うことで、環境保全やゴミの分別を教え、環境問題についての意識改革を行うというプロジェクトに参加した。この活動は、現在世界的に問題であり、インドネシアでも深刻な問題とされる廃棄物・環境問題に対する懸念の中で、すべての問題は小さなステップから始まり、そのステップは私たちの日常生活に深く関わっており、私たちの日常を見直すことで、この地球上の自然や環境、陸上および海洋生物の状態を改善することができるということを子供たちに伝え、彼らの行動や意識を変えるためにインドネシア大学の教授と学生が始めたもので、私は、デポックにあるイスラム教系小学校（Rahmaniyah Integrated Islamic Elementary School）に講演に行く際に参加させてもらった。当日は、日本に現地調査に行った学生が日本のゴミの分別文化や事例を取り上げて、分別の重要性を伝えたあと、それらに関するクイズを行い、その後、実際にゴミ袋を持って学校の校庭のクリーンアップワークを児童と共に行った。私はインドネシア語が得意ではないのだが、そんな私にも積極的に声をかけて、日本の環境保全意識について色々な質問をしてくれて、とても有意義な時間を過ごすことができた。また、インドネシアで深刻な問題である環境問題について、少しでも日本での事例が役に立っていることを知れて、もっと考えや知識を広めたいと思えた貴重な体験だった。

（クイズの様子。積極的に手を挙げている。）

（クリーンアップの様子。）

（集合写真）

3. 人権（ハンセン病）に関する活動 私はインドネシア大学に交換留学をしていたのだが、同時期に同じ交換留学生としてインドネシア大学で学んでいた日本人留学生の友達に、その子が留学前に参加したワークキャンプの主催者の方を紹介してもらい、ハンセン病の元患者の方やその家族の方々が移住してできたナンガット村に訪問した。その方は約 10 年間に渡り、ナンガット村のインフラ整備やハンセン病から回復した人たちに対する差別や偏見をなくすための活動を続けており、現地の学生と日本から来た学生がインフラ整備などのワークをするワークキャンプも開いている。ナンガット村という村は、首都ジャカルタから電車で 9 時間、バスに乗り換えて 2、3 時間のところにあるとても穏やかで景色が綺麗な村である。私は数人の日本人留学生と共に、この村へ行き、ハンセン病回復者のおじいちゃん、おばあちゃん、そしてその家族の方々の話を聞かせて頂いたのだが、この村に住む人達はほとんどの人が「ハンセン病患者」「ハンセン病患者の家族」というだけで、耐え難い差別を受けてきて、今もなお穏やかに安心して暮らすことができないという状況を知ることができた。それにも関わらず、話をしてくれたすべての人がとても明るく、常に

笑顔で、「マンゴー食べる？」「マンゴーしかあげられなくてごめんね。」「わざわざ来てくれてありがとう。」と、とても暖かく元気に迎えてくれて、とても暖かい気持ちになったと同時に、笑顔の裏に想像もできない程の苦しみや憎しみがあるのだなととても切なく、悔しい気持ちになった。また、「この村に来ることや、私たちハンセン病患者（回復者）と関わることは怖くないの？」と聞かれたのがとても印象的で、彼らの強さや明るさの裏には、これまで受けてきた想像し難い差別の記憶が強く残っているのだなと感じ、何もできない自分がただただ悔しかった。

私は、この訪問を通してもっとハンセン病について学びたいと強く思うことができた。また、インドネシア語が全く話せない状態で留学に行った私は、生活するためのインドネシア語は話せるものの、現地の方と話をしたり話を聞いたりすることがまだまだできない状態で、村の方々とのやりとりは全て他の日本人の方の通訳を通して行ったので、彼らが本当に伝えたいことを理解することができず、私が伝えたいこと、感じたことを自分の言葉で伝えられないことがとても悔しく、ただただ涙を流すことしかできない自分の無力さを感じたので、次彼らに会えるときまでに、きちんと直接話ができるようにインドネシア語の勉強もこれまで以上にきちんとしようと強く感じた、とても素敵で貴重な経験だった。

（療養所のおばあちゃん。）

（村の方々は皆常に笑顔だった。）

（滞在中お世話になったおうちの方々と。）

おわりに

今回新型コロナウイルスの影響で帰国を 4 ヵ月早め、留学を中断したことを筆頭に、思い通りにいかないことも多く、やり残したことやまだ足りないもの、身についていないものや後悔もたくさんあるが、それらを悠々と超えるほど、とても充実した楽しい留学生活を送ることができた。

これは、この山梨県大村智人材育成基金事業がなければ叶わなかった日々や経験なので、知事をはじめとする関係各所の方々には本当に感謝しています。この度は貴重な経験をする機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。